経営論集
Vol.2, No.6, March 2016, pp.1-23
ISSN 2189-2490

■ 論文 ■

社会的動機の様式（利己性・利他性・集団性・原理性）におけるキャリア選択の分析

――キャリア選択の動機・認知様式に関して――

新　井　立　夫
山　岡　三　子
石　塚　　浩

概要

生徒、学生のキャリア選択の判断は、自己について考えた後、他者や組織への配慮、慣習や規則を意識したうえで、判断しているものと思われる。このようなことは、必要な場面に直面したときだけではなく日常的に行われており、弱者への援助行動についても同様といえる。

このことから、キャリア選択を考察する際において、自己のことのみならず、他者との関係性や集団組織との関係性、慣習や規則（ルール）との整合性を総合的に捉え、ある範囲の社会的な様式を表していると考えられる。

社会心理学者である Charles Daniel Batson（チャールズ・ダニエル・バトソン）が、『Altruism in humans』（翻訳本『利他性の人間学：実験社会心理学からの回答』新曜社（2012））の中で、４つの社会的動機の様式を示した。本研究の目的は、この示された様式・利己性（Egoism）・利他性（Altruism）・集団性（Collectivism）・原理性（Principlism）を主軸に、キャリア選択の価値観を利己性、利他性、集団性、原理性の視点から捉え、特に初期のキャリア判断の過程に関して検討することである。

具体的には、生徒、学生が個人のキャリア選択について判断する際、不確実な思考対象に対して、意識的あるいは無意識的に、自分のためなどを中心とする自己利益の獲得を目指した価値判断をするなど、自己のキャリアに対する認知的環境を再構成していこうとする種々の認知過程が存在するはずである。仮定された自己のキャリア選択の志向が、４つの社会的動機の様式に影響されるのかを取り上げたうえで分析し、明らかにしたい。

キーワード：キャリア選択、利己性、利他性、集団性、原理性、向社会性

（受領日　2016年２月１日）

文教大学経営学部
〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
Tel 0467-53-2111（代表）　Fax 0467-54-3734
http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/

経営論集　Vol.2, No.6（2016）pp.1-23

社会的動機の様式（利己性・利他性・集団性・原理性）におけるキャリア選択の分析

――キャリア選択の動機・認知様式に関して――

新　井　立　夫*、山　岡　三　子**、石　塚　　浩***

1．問題

グローバル化や情報化などの社会全体の急激な変化に伴い、キャリア教育の推進や望ましい進路指導を実践するうえで、経験則のみならず、高度化・複雑化する諸課題への対応が必要となっている。とりわけ学校教育においては、教育活動全体で推進するキャリア教育を中心として適切に対応することが、必要不可欠といえる。

児童・生徒・学生は（以下、生徒と表記）、今後の知識基盤社会及び生涯学習社会の担い手である。よって、学校教育におけるキャリア教育は、この新しい社会を担う力（生きる力）を身につけさせることを見据えたものでなくてはならない。そのためには、既存の知の伝達にとどまらない「新たな学び」「新たな価値観」を生み出すキャリア教育を実施する必要がある。

そうであるならば、「教えること」と「学ぶこと」の専門職である教員の価値観も、生徒たちに対して変えていかなければならない。キャリア教育の本来の目的・目標を認識し、専門的知識を常に学び直し、自らの実践を理論や論拠に基づき、省察することが必要となる。それにも拘わらず、現在の学校教育において実践されているキャリア教育は、「将来の自己実現」に視点を置きすぎていまいか。つまり自分のためのキャリア教育であり、そこからは人格形成における「価値観」及び「効力感」の育成に関する視点が抜け落ちている感がある。端的にいえば、「自分のためだけの狭すぎるキャリア教育」といえる。

生徒たちのキャリア選択は、自己について考えた後、他者や組織への配慮、慣習や規則を意識したうえで、判断しているものと思われる。このようなことは、必要な場面に直面したときだけではなく日常的に行われており、弱者への援助行動についても同様といえる。

以上のことから、キャリア選択を考察する際には、自己のことのみならず、他者との関係性や集団組織との関係性、慣習や規則（ルール）との整合性を、社会的様式の中で総合的に捉えることが重要であると考える。

社会心理学者 Charles Daniel Batson（チャールズ・ダニエル・バトソン）は、『Altruism in humans』Oxford University Press（2011）（翻訳本『利他性の人間学：実験社会心理学からの回答』新曜社（2012））の中で、利己性（Egoism）・利他性（Altruism）・

* 文教大学経営学部
✉ tatsuo@shonan.bunkyo.ac.jp
** 名古屋短期大学英語コミュニケーション学科
✉ yamaoka@nagoyacollege.ac.jp
*** 文教大学経営学部
✉ ishizuka@shonan.bunkyo.ac.jp

集団性（Collectivism）・原理性（Principlism）という社会的動機を様式化させた。この考えに則って本研究では、生徒たちがキャリア選択をする際の判断過程を、上記４つの視点から捉えることを試みている。これにより、生徒たちのキャリア選択における実際の価値観と効力感との関連性を見いだすことを目的とする。

具体的には、生徒たち個人が、キャリアを選択する際に、不安定な関係にある対象に対して、意識的あるいは無意識的により安定した価値判断をし、自己のキャリアに対する環境を再構成していこうとする認知過程が存在すると考えた。そしてその際に、上記で示した４つの社会的動機のうちどの因子の影響を受けているのかを分析し、考察することとする。

２．キャリア教育の本質的な課題

初めて「キャリア教育」の文言が、文部省の公式文書「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（中央教育審議会答申：1999年12月）に登場して以来、15年が経過した。それを受けて教育現場では、自己理解を促す学習に始まり、職場・職業調べを行い、その中で自己のやりたいこと探しを実施している。さらに、希望する職業（仕事）を選択させたり、職場体験・インターンシップを実施したり、上級学校若しくは就職先調べを行い、10年、20年、30年先を見据えた、将来のキャリアプラン作成を中心とした活動に終始しているように見受けられる。キャリア教育の本質的な狙いは、このような狭いものなのだろうかと疑問を持つのは、私だけではないはずだが、未だにキャリア教育の推進に当たり、転換がなされる気配はない。

以下に、大きな課題として３つを挙げる。

①キャリア教育の視点が、個人の自己実現という名のもと、個人の価値観に偏り、他者のため、集団のため、原理原則の視点がなく、自分のための視点に狭くなりすぎている。

②キャリア教育の到達ラインが、上級学校探しを含めたうえで、職業・仕事の選択（就労）だけになってしまっている。

③キャリア教育の取り組みが、学校教育における教育活動全体での取り組みになっていない。（例えば、インターンシップなどの外付けの行事に偏り、各教科、特別活動、総合的な学習の時間、ＰＴＡ行事などの教育活動全体に亘っての釣り合いの欠如）

現在、生徒たちに対して実施されているキャリア教育の終着点は、自分自身がなりたいものになれればいいと、企業などに就職することになっているように見受けられる。各学校における実践では、自己理解に関する取り組みや職業・仕事理解などに関する学習などの取り組みには、与えられる時間や内容にそれなりの幅があるにしろ、最終的な導きは、生徒たちの就労を促していくところに収斂されてしまっている。ともすれば、キャリア教育＝就職というような認識を生徒たちにさせてしまっていることが、生徒たちの望ましいキャリアの捉え方や生き方・在り方を、狭めているといえる。

３．キャリアの原点

キャリア教育とは、「キャリアのための教育」である。では、その「キャリア（career）」について、どのように捉えなければならないのかを、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年１月31日）を参考に整理してみたい。

答申ではキャリアについて「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。」としている。

要約すれば、「キャリア」とは、「これまでの人生とこれからの人生における自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねの履歴」といえる。私としては、以下のように解釈している。つまり、これまでのキャリアの履歴は、変えることはできないが、これからのキャリアの履歴については、定まったものではなく、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものであると。そして、時勢などにともない人生の節目や転機が訪れ、変化・変容する可能性を含んでいるものこそが、将来のキャリアの履歴なのだと。ゆえに、キャリアを考えるうえで、「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている」という関係性を見落としてはならないのである。そしてそれは、利己性（Egoism）・利他性（Altruism）・集団性（Collectivism）・原理性（Principlism）を主軸として、キャリア選択においても、上記4つの視点から捉える必要性の教育に他ならない。この認識に立てば、将来のキャリアを見いだすための価値観は、自分のためだけの職業や就労をするための適応・準備ではないことは、明らかである。

4．キャリア発達の意訳

キャリア発達についても、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011年１月31日）を参考に整理してみたい。

キャリア発達を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。」としている。生徒一人一人が、それぞれの段階に応じて、適切に自己と働くこととの関係付けを行い、自立的に自己の人生を方向付けていく過程、言い換えると「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」が「キャリア発達」である。

具体的には、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程と捉えることができる。Donald Edwin Super（ドナルド・エドウィン・スーパー）は、このキャリア発達の過程を、生涯における役割の分化と統合の過程として示している。人の成長・発達の過程には、節目となる発達の段階があり、それぞれの発達の段階において克服あるいは達成すべき課題がある。それと同様に、キャリア発達にも、幾つ

かの段階があり、各段階で取り組まなければならない課題がある。人は、自己実現、自己の確立に向けて、社会とかかわりながら生きようとする。そして、各時期にふさわしいそれぞれのキャリア発達の課題を達成していく。このことが、生涯を通じてのキャリア発達となるのである。キャリア教育は、そのような一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならない。」としている。この視点からしてみても、生徒たちに実施しているキャリア教育におけるキャリア選択の動機・認知様式の価値観は、狭すぎるという課題が明らかになってくる。

社会的存在である生徒は、これまでの人生とこれからの人生において、様々な「役割」があり、それらを引き受けながら人生を過ごしていく。「役割」を引き受けるということは、すなわち、他者や集団、原理原則とも関わりを持つことである。そしてその中で、関係性を担い、参加し、貢献することを意味する。こうした「役割」を担うことができるように成長し、それぞれと関わりを持ち、課題を達成していきながら、自己の「生き方・在り方」として、折り合い（統合）をつけていけるようになることが、ここで意味する「キャリア発達」である。

この「キャリア発達」を支援する教育が、「キャリア教育」であるとするならば、それは、生徒たちが、将来担うであろう「役割」を遂行するための資質向上や能力の育成に資するものでなくてはならない。そしてそこにおける価値観は、自己理解、職業理解、職業体験、キャリアプラン作成などの主要ジャンルに限定された狭いものであってはならない。

5．社会的動機の様式（利己性・利他性・集団性・原理性）におけるキャリア選択の分析

5.1　目的

上述の点を踏まえて本研究では、社会的動機の様式（利己性・利他性・集団性・原理性）に視点を置いて、生徒のキャリア選択を分析し、検討することを目的とする。

その際に、現在のキャリア教育等で、実施されている重点的視点「利己性（自分のため）」を、考察の基点とした。

5.2　仮説

実施・分析をするにあたり、以下の仮説を立てた。

仮説１　生徒たちのキャリア選択の価値観は、自分の福利のためを基軸として強く意識し、判断している。

仮説２　自分の福利のためと考えていても、他人の福利、集団の福利、原理性そして向社会的行動をすることは、両立する。

【仮説設定の理由】

「情けは人の為ならず」ということわざが意味するごとく、「人に情けをかけるのは、その人のためになるばかりでなく、やがてはめぐりめぐって自分に返ってくる。人には親切にせよという教え」を基軸とした。つまり、他者を助けるのは自分のためにもなるという考えが、キャリア選択の際にも生徒の価値観・効力感の中に存在するであろうことを前提とした。

この理念をもとに本研究では、社会的動機の様式（利己性・利他性・集団性・原理性）に視点を置いて、効力感としての向社会的行動との

関連性を分析すべく、仮説１と２を設定した。

5.3　キャリア選択の動機付けの様式

キャリア選択の【価値観】としての尺度は、バトソンが示した４つの様式を基軸とする。

①利己性　自分自身の福利を増加させることを最終目標にする動機付け（自分の福利）

②利他性　他者の福利を増加させることを最終目標にする動機付け（他人の福利）

③集団性　集団の福利を増加させることを最終目標にする動機付け（集団の福利）

④原理性　ある道徳的原理を守ることを最終目標にする動機付け（ルール等を守る）

また、キャリア選択における【効力感】（実際に行うことができる望ましい行動）に関する向社会的行動（prosocial behavior）の定義は、「行為者の動機の有無にかかわらず、他者に利益をもたらすような自発的な行動」とし、反社会的行動（社会的な規範に反し、社会の秩序や平穏を乱す行動のこと）の反対を意味するものとした。

5.4　方法

①調査対象者

本研究では、キャリア選択の動機・認知様式に関して調査を実施するので、ある程度は実際にキャリア選択を経ていなくてはならないと判断し、その選択における時系列性や環境、背景などの価値観が、ある程度は均一に行われているような条件にて、絞り込みを行った。そうした経緯を経て、対象校を高等学校、教育課程は普通科とし、その中においても四年制大学進学希望者が90％以上という進学校とした。その高等学校に属する生徒を対象とし、所属学年は第３学年のみとした。

調査対象高等学校：県立高等学校　６校

調査対象者　　：高校３年生　746名

②実施時期と具体的方法

2015年７月上旬から下旬にかけ、アンケート調査を実施した。記入は、対象クラス別にて、落ち着いた環境において時間を20分程度と定めて、生徒が属する高等学校の各教室にて実施した。

③アンケートの内容

質問項目の設定にあたっては、対象高校における３年間の進路指導に関わる関連行事などを洗い出し、生徒たちのキャリア選択を行う主軸となっている共通事項を質問項目とした。また、対象校のアンケートの依頼文に次の内容を付した。

「キャリア選択の向社会的動機・行動について、その認知様式および行動様式に関するアンケートを実施し、キャリア選択の指導に役立てたいと考えています。本アンケートでは、向社会的動機・行動を次の４つの項目に整理し、それぞれについて生徒の皆さんが、どのように感じ、実際に自分から出来ているか又は出来るかを調査しますので、ご協力くださいますようお願いいたします。」

さらに、高校３年生が調査対象者なので、専門用語でなく、理解しやすい文言として表記し、用語解説を付け加えた。

《用語の解説》

①自分のため（利己性：自己の利益のために行う動機・行動）

②誰かのため（利他性：他者の利益のために行う動機・行動）

③みんなのため（集団性：集団（例えば家族、自分の学校など）の利益のために行う動機・行

動）

④決まりだから（原理性：道徳的原理や特定の価値観や信条、教条のために行う動機・行動）

【価値観】（何が大切で、何が大切でないかという判断）の尺度

例としては、①②③④の項目に関して、あなたは、コース選択や文理選択をするときの動機（価値観）と実際（効力感）はどうですか。

1．全く思わない　　2．あまり思わない

3．少しは思う　　4．思う

の４段階の選択肢の中で、回答を求めた。

【効力感】（実際に出来ているか、出来るかという行為）の尺度

⑤あなたは、どのくらい向社会的行動（他者に利益をもたらすような自発的な行動）が出来ていると思いますか。（自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ましたか）

1．全く出来ない　　2．余り出来ない

3．少し出来る　　4．出来る

の４段階の選択肢の中で、回答を求めた。

（質問票については、〔付表２〕を参照）

5.5　分析方法

回収したアンケートの中において、無記入及び記入ミスと思われるところは、すべて欠損値として処理を行った。その最大有効回答者数は、741名であった。

仮説１についての分析は、要因分析及び多重比較を実施し、平均値を比較した。

仮説２については、①「利己性（自分のため）」を目的変数、それ以外②「利他性（誰かのため）」③「集団性（みんなのため）」④「原理性（決まりだから）」⑤「向社会的行動」を独立変数として、stepwise 法による回帰分析を実施した。stepwise 法を用いた理由は、独立変数間の相関の高さを考慮したからである。

5.6　結果

仮説１の分析結果は、次のようになった。

記述統計分析を行い、「利己性（自分のため）」が、平均値3.0以上となった。（設問10を除く）

統計的有意差があるかどうか確認するために一要因分散分析を行った。すべての質問項目において0.1％未満の有意水準で、違いがあるとされた。

変数間でどこかに有意な差があることが判明した。そこで、「利己性（自分のため）」がどの変数との間で有意な差異があるかを多重比較分析で調べた。等分散性が得られなかったので多重比較の Tamhane 法を使って分析をした。

多重比較をした結果、設問10を除き「利己性（自分のため）」の平均値が、有意に高かった。この結果から本データは、仮説１を支持しているといえるだろう。但し、アンケート設問10は、後輩のために話をするという設問であるので、設問の本質的な趣旨として「利己性（自分のため）」のものではないということである。

仮説２の分析結果について示すと〔付表１〕、回帰分析（stepwise 法）結果は、向社会的行動の標準偏回帰係数が、正で有意になったことから「利己性（自分のため）」という価値観と両立するに留まらず、むしろ共に高まっていくことをデータは示した。

このことから、たとえ「利己性（自分のため）」と考えていても、向社会的行動が取れることが判明した。

一方、「利他性（誰かのため）」「集団性（み

んなのため)」「原理性（決まりだから)」については、係数が負になったり有意ではなかったりの項目があった。価値観としての「利己性(自分のため)」という概念と「利他性（誰かのため)」「集団性（みんなのため)」「原理性（決まりだから)」という概念において、相反する場合と両立するに留まるものがあることを示した。

上記の結果は、通常の観念（自分のことばかり考えている者は、向社会的行動をとることもなく、他者や集団のこと、慣習やルールのことは、あまり考えないであろうとみなす）を、否定するものであった。翻って結果を捉えてみると、私を滅し、公に奉ずることを意味する「滅私奉公」的な概念は、否定的に捉えられがちなのだが、本研究データが示すように「向社会的行動」を促す一つの指針としても「利己性（自分のため)」のことを考えられている者こそ、「向社会的行動」のことを意識し行動がとれることにつながるともいえる。さらには、本研究の尺度としての「利他性（誰かのため)」「集団性（みんなのため)」「原理性（決まりだから)」という３つの概念は、向社会的行動のための必要条件になるものではないことがデータから読み取れる。

5.7　考察

本研究により「自分のため」と考えていても、向社会的行動が取れないというわけでないことが判明し、負の相関でもないことが明らかになった。むしろ「自分のため」と考える価値観が高いと向社会的効力感が高まっているという結果は、今後、キャリアを考えさせたり学ばせたりする際の大きな指針となるといえる。以下では、本結果を原拠として考察を進めて行きたい。

現在、学校教育において、キャリア教育のプログラムの中に、一定の順次性なるものが想定されているように感じられる。「中学校キャリア教育の手引き」（文部科学省（2011年５月)）第３章第３節　３年間を見通した系統的なキャリア教育の取組(P126)に示されている事例のベースとなっている論法は、自己理解をする⇒職場・職業調べ⇒やりたいこと好きなことを考える⇒職場体験・インターンシップを実施⇒将来就きたい職業（仕事）を選択⇒そのための上級学校若しくは就職先調べ⇒将来のキャリアプラン作成という流れである。端的には、自己理解→ゴールの設定→最短距離で一直線に計画を立て努力し実現するという論法である。(その他の要素や視点がないという捉え方ではなく、巨視的に論法を掴んだうえで解釈した場合の見解である。)

少し乱暴な表現でいうと、アメリカでの社会人（転職）を対象として発展してきた「キャリアガイダンス理論」を日本の小学校からのキャリア教育プログラムに落とし込んでしまったのではないだろうか。しかもその展開の仕方は、小学校に始まり、中学校１年生から２度目の循環、高校１年生になり、３度目の循環過程を経て、上級学校に進み、また自己理解から４度目が繰り返される。その都度、自己理解→ゴールの設定→最短距離で一直線に計画を立て努力し実現するという論法が、繰り返されている。

この循環過程において、向社会的価値観や効力感を育成する観点は乏しい。キャリア発達の視点や社会情勢や個々の役割の変容、人としての生き方・在り方の視点を育むプログラムが組まれていないことに、望ましいキャリア選択の価値観や効力感を育むことができない大きな要

因があるのではないか。いずれにしても、この論法を日本の小学生に対してはもちろんのこと、中学・高校生の生徒たちに適合させること自体に無理や矛盾が生じてしまうのは当然のことといえる。

生徒たちのこれからのキャリア履歴については、直線的に定めるものではなく、定まったものでもない。生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。時勢などにともない人生の節目や転機が訪れ、変化・変容する可能性を含んでいるものこそが、生徒たちのこれからのキャリアになるものである。

価値観・効力感においても、一直線の狭い価値観で、分かったつもりになって、自分はこうあるべきだと定めさせるキャリア教育とはいかがなものであろうか。言い換えれば、その狭い価値観（意識）こそ、本質的なものではなく、本来的な意味においての自分のためになる教育とはいえない。

本研究は、現在のキャリア教育での価値観や効力感を否定するものではない。むしろ、今まで育んできた価値観を、より大きく高い次元にある「自己の生き方・在り方の視点」や「就労に際して大切にしなくてはならない価値観」へと統合していくことを目指している。つまり、キャリア選択の際に、利己性・利他性・集団性・原理性という４つの社会的動機の視座を挿入する必要性の提言である。

アンケートの結果から具体的に述べれば、本アンケートを依頼した高校生のなりたい職業は、医師であったり、研究者であったり、公立学校の先生などが、上位にランキングされているようである。（資本金が大きく、従業員が1,000人以上の大きな企業の「会社員」という選択項目はおそらく示されていないからであろう）このような特定の専門的職種は、日本の職業社会としての雇用の主要形態ではない。むしろ、専門職として、雇用＝職業（仕事）と切り分け分類されていない俗にいう「会社員」として雇用されていくのである。特に、文系のホワイトカラーと称される雇用形態においては、その会社の職種において、どんな配属部署に配属されたとしても、その仕事に対して対応できることが求められるのである。それに対して、現在実施されているキャリア教育において求められるのは、今ある職業の中から「自分としてやりたいこと（＝職業・仕事）」を取捨選択し、マッチングさせていく能力の育成である。ここにおいても、キャリア選択における価値観や効力感の大きな相違が生じているのである。

この例からも、生徒たちは、実際的な意味において職業（仕事）や雇用の実情をよく理解していないのである。その中で、キャリア教育として取捨選択をさせ、絞り込み、見つけさせることは、イメージ先行で思い込ませ、やりたいことを中心に出たとこ勝負的な選択をさせていることに他ならない。

そうであるならば、現在、過去、未来の産業構造や職業（仕事）の構成が、どのように移り変わってきたか、どのように移り変わっていこうとしているのかを把握させ、現実の職場（仕事）における就労（労働）実態を認識させることが必要であろう。そのうえで、多種多様な選択肢があり、必要なスキルや資質が求められ、それらが、時勢とともに大きく移り変わっていくことを理解させるような教育こそ、不可欠なのではないだろうか。

これらをおおまかに掴ませるためにも、自分が働いて生きていくうえで大切にしたいものは

何なのか、何をどのようにしてやり遂げてみたいのかといった「価値観」と併せて、理系の知識やスキルを必要とする職業（仕事）に就こうとするのか、あるいは文系のそれを必要とする職業（仕事）に就こうとするのかという「羅針盤」（効力感）を持たせなくてはならない。そのうえで、キャリア発達の方向付けをしていくことが、なくてはならないといえる。時には思いどおりいかず、大きくうねることもあり、変わることもあるはずである。しかしキャリア発達や加齢に伴って、折り合いをうまく付けられるようになれば、その幅は自ずと収斂されてくるはずである。

このことが、本研究であげたキャリア選択の動機・認知様式の価値観（利己性・利他性・集団性・原理性）と向社会的行動を具現化していくという効力感を育み、今後の学校におけるキャリア教育の推進の主軸となるべきものと提言したい。

この価値観と効力感という主軸が、大きく深く根を張ることになれば、たとえ自分の目指した特定の専門的な職業（仕事）に就くことができなくても、広い価値観で捉えることができ、その現実だけで堕落するようなことにはならないと思われる。端的にいえば、それほど困らないで済む感覚になるといえる。なぜならば、自分のため、他人のため、集団のため、原理原則のためといった価値観で物事を捉えることができるようになれば、自分が大切なものは、専門性に限定された狭い業務内容そのものではなく、自分が置かれている立場や役割を踏まえたうえで、人材としての価値観を満たすことにあることと気づくはずだからである。この感覚を持たせることが、職業（仕事）や就労などのキャリアを考えさせるうえで、重要であると考察した。

また、2012年度には「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」（以下、総合的実態調査と表記）が、全国の小学校・中学校・高等学校を対象に実施された。以下では、平成17年度に実施した調査から７年経過し、キャリア教育に対する意識や取り組みは、どのように変化したのかを踏まえつつ、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターによる第１次報告書(2013年３月公表)及び第２次報告書(2013年10月公表）を取り上げてみたい。なぜならそこには、本研究と併せて、今後のキャリア教育や進路指導の課題を考えるうえで、認知しておかなければならない傾向が顕著に示されていると考えるからである。

総合的実態調査において、小学生・中学生・高校生の約９割が、将来「働きたいと思っている」と回答している。そして、その職業や仕事を選択する基準に関する問いにおいては、興味深い傾向が現れている。今回の調査で、自分の職業や仕事を選ぶ際に重視することの割合は、小学校（78.8%)、中学校（69.3%)、高等学校(62.6%)といずれの学校種においても、「自分の興味や好みにあっていること」が、一番重視する項目となった。(前回の調査での「とても重視したい」割合の１番は、「自分の能力や適性がいかせること」であり、中学校61.8%、高等学校64.3% であった。）前回調査は、小学校の調査を実施していないことや回答方法が異なるため、単純比較はできないが、客観的な比較ができる「能力･適性」から主観的な判断が大きい「興味・好み」に変容している点である。

また、株式会社マイナビの2014年３月「2015年卒マイナビ大学生就職意識調査」（２つ選択、n=9,705）による大学生の企業選択のポイント

では、自分のやりたい仕事(職種)ができる会社が、40.3%と2番目の安定している会社(27.3%)を大きく引き離して1番目に選択されている。ここに、今ある職業の中から「自分としてやりたいこと（＝職業・仕事)」を取捨選択し、マッチングさせていくキャリア教育において能力育成をしてきた結果とすることは、飛躍的すぎるであろうか。

今回の調査での向社会的行動につながるような問いに対する回答は、小学校「社会や人のために役立つ職業」が5番目（53.3%)、中学校「社会や人のために役立ち貢献できること」が5番目(43.6%)であり、同項目で高等学校が4番目(45.4%)である。(前回の調査では、中学校が、4番目(19.2%)、高等学校が、4番目(20.6%)であった。）この総合的実態調査からも、生徒たちは「自分としてやりたいこと」を中心に価値判断をしているが、それと同時に「社会や人のために役立つ」という視点も用いていることがうかがえる。

以上の諸調査と照らし合わせてみても、そのいずれもが、本研究の分析結果を支持していることが分かる。つまり、自分のためと考えていても、向社会的行動が取れないというわけではなく、負の相関にもなく、むしろ自分のためと考える価値観が高いと向社会的効力感が高まっているという結果がそれにあたる。ゆえに今後の課題として、この総合的実態調査における「社会や人のために役立ち、貢献できること」の項目の比率を、いっそう向上させていく取り組みの必要性が、挙げられるのではないか。

加えて、学校教育における具体的な取り組みとして、「構え教育（態度教育)」を各科目の授業の中にも取り入れることを提案したい。この「構え」とは、生徒たちが、何かを得たい場合や物事に立ち向かうときに求められる心と身体がセットになった「積極的受動態勢（積極的に受け入れようとする心と身体の姿勢・態度)」である。例えば、授業規律の必要性などを指導する場合、生徒の精神的・肉体的な発達段階を含めた個別的実態とニーズが乖離していると(構えがないと)、指導する側の思いやねらいが理解されにくく、成果に至りにくいからである。また、合わせて、個人の固定的な価値観に狭められることのないように、他者や集団、原理原則などと常に関わりを持つような能動的な学修（例えば、アクティブ･ラーニング型）展開が図れる取り組みを提案したい。

その展開にあたり、向社会的行動の動機を高めるプログラムの開発が必要不可欠であるが、根本理念において向社会的な行動をする際やキャリア選択などの際に、「互恵性」の価値観を忘れてはならない。「互恵」とは、互いに特別な便宜や利益などを与えたり受けたりすることである。互恵性の考え方では、規律であれば、「規律」を守る者が、「規律」によって守られ、クラスの秩序を守ろうとする者が、クラスの秩序によって守られるのである。この思惟こそ、まさに本質的な「自分のため」を意味している。

このような価値観は、仮説の設定理由にも述べた「情けは人の為ならず」ということばの本質的に意味するところでもある。キャリアの選択を判断する場合の価値観の大前提に、この互恵性ともいうべき価値観が、教える側、教わる側の根底に存在していなくてはならない。「互恵性」がなければ、礼儀作法だとか、規則だ、決まりだといったところで、守るという本質的な意味が理解されていないので、守ろうという行為が機能するはずがないといえる。

では、どう考えさせれば良いのだろうか。向社会的行動につながる価値観とは、自分たちの学びや生活そのものに結びつくものであり、その集団組織に参加している自分たち全体の問題であるという意識に支えられてこそ、有効に機能するものである。よって生徒には、集団組織で示されている規律や秩序を守ることが、何のために必要かという点を理解させなくてはならない。端的にいえば、社会の規律や秩序を守ることによって、自分たちにはどのような良いことがあり、どのように守られていくのかという価値観の育成である。

向社会的な行動を促す取り組みやキャリア選択を考察させる価値観の構築には、この「互恵性」という価値観を、教える側と教わる側が、共通に認識したうえで、本質的な「自分のため」というしなやかな価値観を築いていくことに他ならない。

さらに、キャリアのみならず人生を成功裏に導くうえで、興味深い研究にコロンビア大学の心理学者である Walter Mischel（ウォルター・ミシェル）教授が実施した「マシュマロ・テスト」がある。概要は、次のとおりである。スタンフォード大学内の保育園４歳児186人を対象に、マシュマロを差し出し、自制心を計測する取り組みを行った。「マシュマロ１つは、いつ食べてもいいけど、大人が戻ってくるまで我慢できたものには、マシュマロを２つ食べられる」というものである。結果として、３分の２は我慢できずにマシュマロを食べてしまったものの、残りの３分の１は、我慢してマシュマロを２つ得ることとなった。その後、４歳児の追跡調査を行い、高校生時には、ＳＡＴ（大学進学適性試験：Scholastic Assessment Test）のスコアに大きな差が生じ、我慢してマシュマロを２つ手にしたものは、我慢できずに食べてしまったものより、スコアがかなり高くなったことを明らかにした実験である（Mischel, 2014）。

さらに、シカゴ大学の James Joseph Heckman（ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン）教授らは、人生の成功においては、学力テストでは計測できない「非認知能力」がきわめて重要であることを主張している。それは、以下のとおりである（Heckman, 2013）。

・自己認識（Self-perceptions）
・意欲（Motivation）
・忍耐力（Perseverance）
・自制心（Self-control）
・メタ認知ストラテジー（Metacognitive strategies）
・社会的適性（Social competencies）
・回復力と対処能力（Resilience and coping）
・創造性（Creativity）
・性格的な特性（Big 5）

特にこの Big 5 について、鶴光太郎教授（慶應義塾大学）は、教育と労働を統一的に考えるうえで、この「非認知能力」の役割を強調した研究が有益であると論じた（表参照）（鶴, 2014）。

ここでヘックマン教授が引き合いに出したのは、かつて徒弟制度の下では、若者が大人と信頼関係を結びながら指導や助言を受け、その中で技術の他にも、仕事をさぼらない、他人とうまくやる、根気よく仕事に取り組む、といった貴重な「性格スキル」を身に付ける事ができたという事例である。こうした事は、現代の日本でも職人の世界では普通に見られるもので、それは職人の世界が技術だけではなく、「性格スキル」をアップするうえでも極めて有効なシス

	定　　義	側　　面
真面目さ	計画性、責任感、勤勉性の傾向	自己規律、粘り強さ、熟練
開放性	新たな美的、文化的、知的な経験に開放的な傾向	好奇心、想像力、審美眼
外向性	自分の関心や精力が外の人や物に向けられる傾向	積極性、社交性、明るさ
協調性	利己的ではなく協調的に行動できる傾向	思いやり、やさしさ
精神的安定性	感情的反応の予測性と整合性の傾向	不安、いらいら、衝動が少ない

（2014年１月20日　日本経済新聞朝刊17面より引用）

テムであるという事を、われわれに示している。今後、生徒たちが社会で自立して生きていくうえで、学校教育活動全体でのキャリア教育において、この「非認知能力」の向上に積極的に取り組むことが、重要かつ効果的といえる。

このことは、キャリアを考えるにあたり「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。」という関係性を見落としてはならないということである。そしてそれは、利己性（Egoism）・利他性（Altruism）・集団性（Collectivism）・原理性（Principlism）を主軸に、キャリア選択の価値観も利己性、利他性、集団性、原理性の視点から捉えさせ、向社会的行動を促す教育の意義性を強調した本研究の狙いと相通じるのである。

5.8　今後の課題

本研究において自分のためとする価値観が高くても向社会的行動がとれないわけでないことが明らかになり、この各価値観や効力感は、今後のキャリア教育を展開させる大きな指針となると考察した。

しかし、先の5.4方法①調査対象者のところでも述べたように、本研究結果は、進学校における高等学校３年生を対象として調査を行ったものである。今後の課題としては、今回証明された仮説の汎用性をさらに高めていくために、中堅進学校や進路多様校の生徒、総合学科や商業・工業等の専門高校の生徒、さらには生徒指導が困難な課題校の生徒などへも対象を広げて、調査を実施、比較分析を図っていきたいと考えている。また、それぞれ違う経路で入学してくる上級学校（四年制大学・短期大学）において、卒業時までにどのように変容していくのかも、対象に含めて分析する必要性を強く感じている。今後は、この調査研究を足がかりに、児童、生徒、学生と立場や役割、さらには加齢による価値観の変容や向社会的行動への効力感を、「非認知能力」との関係性も含めて明らかにしていきたい。

参考文献
新井立夫・石渡嶺司(2013)『バカ学生に誰がした？進路指導教員のぶっちゃけ話』中央公論新社、97-145、207-219ページ。
新井立夫(2014)「授業規律の必要性」『月刊生徒指導』2014年６月号、学事出版、18-23ページ。
国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書』

仙崎武監修・新井立夫編集責任（2014）『進路アドバイザー検定公式テキスト2014』大学新聞社、13-29ページ。

鶴光太郎(2014)「経済教室エコノミックトレンド」『日本経済新聞朝刊』2014年１月20日17面

中室牧子(2015)『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン、84-98ページ。

文部省（1999）中央教育審議会答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』

文部科学省（2011）中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』

文部科学省（2011）『中学校キャリア教育の手引き』

株式会社マイナビ(2014)『2015年卒マイナビ大学生就職意識調査』

渡辺三枝子編著(2007)『新版 キャリアの心理学キャリア支援への発達的アプローチ』ナカニシヤ出版、23-46ページ。

Batson, C. D.（2011）*Altruism in humans*, Oxford University Press.（菊地章夫・二宮克美訳(2012)『利他性の人間学：実験社会心理学からの回答』新曜社、309, 325-330ページ）

Heckman, J.J.（2013）*Giving Kids a Fair Chance: A Strategy that Works*（Boston Review Books, MIT Press（大竹文雄・古草秀子訳（2015）『幼児教育の経済学』東洋経済新報社）

Mischel, W.（2014）*The Marshmallow Test*（柴田裕之訳(2015)『マシュマロ・テスト：成功する子・しない子』早川書房）

National Career Development Association（1994）The Career Development Quarterly VOL43, NO.1（仙崎武、下村英雄編訳（2013）『D・E・スーパーの生涯と理論～キャリアガイダンス・カウンセリングの世界的泰斗のすべて～』図書文化社）

Super, D. E., Savickas, M. L., & Super, C. M.（1996）*The life-span, life-space approach to careers*.

付記　この研究は、平成27年度文教大学経営学部共同研究費による支援を受けたものである。また、2015（IAEVG）国際キャリア教育学会日本大会・日本キャリア教育学会第37回研究大会（2015年９月19日口頭発表）での議論をもとにした。

〔付表１〕

回帰分析(stepwise 法)結果

設問１　あなたが（以下省略)、高校を選択するときに思った価値観（動機）（以下【価値観】と表記）と効力感（実際）（以下【効力感】と表記）はどうでしたか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.209	5.524	.000	.200
4.決まりだから	-.173	-4.573	.000	-.162

調整済み決定係数　.067

設問２　入学後に行った（行う）自己理解検査や（職業レディネステストなど）をする際の価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.313	8.132	.000	.334
2.誰かのため	.108	2.809	.005	.170

調整済み決定係数　.120

設問３　コース選択や文理選択をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.303	8.317	.000	.252
3.みんなのため	-.276	-7.593	.000	-.221

調整済み決定係数　.135

設問４　教科・選択科目を選ぶときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.303	8.317	.000	.252
3.みんなのため	-.276	-7.593	.000	-.221

調整済み決定係数　.119

設問５　職業研究をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.354	10.278	.000	.344
4.決まりだから	-.148	-4.281	.000	-.123

調整済み決定係数　.138

設問６　インターンシップ（職場体験実習）や職場見学等を体験するとき（したとき）の価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.397	10.882	.000	.425
2.誰かのため	.102	2.805	.005	.213

調整済み決定係数　.188

設問７　上級学校（四年制・短期大学・専修学校等）の研究をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.346	9.577	.000	.330
4.決まりだから	-.128	-3.557	.000	-.087

調整済み決定係数　.123

設問８　入学試験区分（指定校・公募制・スポーツ等の推薦入試）の選択をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.362	10.057	.000	.378
2.誰かのため	.097	2.685	.007	.157

調整済み決定係数　.149

設問９　将来、職業選択（就職先を選択）をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.308	8.532	.000	.298
4.決まりだから	-.174	-4.819	.000	-.157

調整済み決定係数　.117

設問10　卒業をする際、１，２年生に向け話をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.270	7.113	.000	.299
2.誰かのため	.093	2.454	.014	.178

調整済み決定係数　.095

設問11　今後、将来のライフプランニング（生活設計）を考えるときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.326	9.325	.000	.360
2.誰かのため	.179	5.123	.000	.242

調整済み決定係数　.158

設問12　高校生活全体を考えるときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.488	14.260	.000	.462
4.決まりだから	-.114	-3.340	.001	-.004

調整済み決定係数　.223

設問13　将来の夢と生き方を考えるときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.349	9.952	.000	.322
4.決まりだから	-.219	-6.235	.000	-.175

調整済み決定係数　.148

設問14　自分を知るとき（自己分析をするとき）の価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.362	10.127	.000	.314
4.決まりだから	-.227	-6.355	.000	-.151

調整済み決定係数　.146

設問15　職業を知るとき（職業研究をするとき）の価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.343	9.781	.000	.307
4.決まりだから	-.248	-7.072	.000	-.199

調整済み決定係数　.152

設問16　職業とキャリアプラン（将来設計）を考えるときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.355	10.085	.000	.321
4.決まりだから	-.220	-6.264	.000	-.166

調整済み決定係数　.148

設問17　職業インタビューを実施するときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.404	11.675	.000	.384
4.決まりだから	-.121	-3.499	.000	-.054

調整済み決定係数　.160

設問18　先輩に聞くなどの上級学校研究をするときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.383	10.778	.000	.340
4.決まりだから	-.205	-5.772	.000	-.126

調整済み決定係数　.153

設問19　先生や保護者、先輩、友達に選択教科・科目を相談するときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.315	8.699	.000	.289
4.決まりだから	-.162	-4.472	.000	-.111

調整済み決定係数　.106

設問20　先生や保護者、先輩、友達に進路先を相談するときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.404	11.562	.000	.373
4.決まりだから	-.184	-5.265	.000	-.117

調整済み決定係数　.170

設問21　進路適性を知るときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.363	10.274	.000	.339
4.決まりだから	-.171	-4.834	.000	-.119

調整済み決定係数　.141

設問22　産業・職業の変化を知るときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.426	12.186	.000	.397
4.決まりだから	-.143	-4.086	.000	-.057

調整済み決定係数　.175

設問23　上級学校（学部・学科・コース等）への進学や企業などへの就職を準備するときの価値観と効力感はどうですか

項目	標準化係数(ベータ)	t 値	有意確率	相関係数
5.向社会的行動	.373	10.661	.000	.344
4.決まりだから	-.175	-5.011	.000	-.114

調整済み決定係数　.146

〔付表２〕
※１ページ目のアンケート説明については、高等学校側の要望に応じて語句を一部変更して実施した。

キャリア教育に関する調査（アンケート）について

キャリア選択の向社会的動機・行動について、その認知様式および行動様式に関するアンケートを実施し、キャリア選択の指導に役立てたいと考えています。本アンケートでは、向社会的動機・行動を次の４つの項目に整理し、それぞれについて生徒の皆さんが、どのように感じ、実際に自分から出来ているか又は出来るかを調査しますので、ご協力くださいますようお願いいたします。

《 用語の解説 》

①自分のため　（利己性：自己の利益のために行う動機・行動）
②誰かのため　（利他性：他者の利益のために行う動機・行動）
③みんなのため（集団性：集団（例えば家族、自分の学校など）の利益のために行う動機・行動）
④決まりだから（原理性：道徳的原理や特定の価値観や信条、教条のために行う動機・行動）

【価値観】（何が大事で、何が大事でないかという判断）の尺度
①②③④の項目に関して、あなたは、コース選択や文理選択をするときの動機（価値観）と実際（効力感）はどうですか。
４段階の回答選択肢の中で、選択をする。
１　全く思わない　２　あまり思わない　３　少しは思う　４　思う

【効力感】（実際に出来ているか、出来るかという行為）の尺度
あなたは、どのくらい向社会的行動（他者に利益をもたらすような自発的な行動）が出来ていると思いますか。
４段階の回答選択肢の中で、選択をする。
１　全く出来ない　２　余り出来ない　３　少し出来る　４　出来る
自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ましたか。

★　アンケート項目に対して回答をするときには、質問項目に関してキャリアに対する①②③④のそれぞれの側面も思考するようにして、回答をお願いいたします。

例えば、医療関係に興味関心が高く、保護者が開業医を営み、病気に苦しむ人のために医学部に進学したいと思う、熱心なキリスト教徒の生徒は、利己性（自身の希望を叶えたい）、利他性（困っている人を助けたい）、集団性（地域医療に尽くしたい）、原理性（神の教えに寄り添う行為）のいずれも価値観の意識が高くなり、重みを置くことになり、このような思考により回答をすることとなります。

アンケート項目の該当する数字や記号、文字に〇をつけてください

Ⅰ〔現況調査〕

１．入学年度を教えてください　→　平成（２７年・２６年・２５年・２４年）４月入学

２．性別を教えてください　→　男　・　女

３．所属している学科を教えてください　→　普通科　・　総合学科　・　商業科　・　国際科　・　福祉科

４．現在までの評定平均値　→　A 段階　・　B 段階　・　C 段階　・　D 段階　・　E 段階
（５段階評定平均値が、分からない人は、だいたいの数値の判断で構いません）
（参考：A 段階=評定平均値 5.0～4.3、B 段階=4.2～3.5、C 段階=3.4～2.7、D 段階=2.6～1.9、E 段階=1.8 以下）

※　次のページから具体的な項目の回答をしていただきますが、皆さんが実施していない項目は、これから行うとした場合を想定して、回答してください。また、終えてしまっている項目は、過去形にとらえて直して回答してください。（例：出来ますか→出来ましたか、出来る→出来た）

Ⅱ〔キャリア選択アンケート項目〕

１．あなたが（以下省略）、高校を選択するときに思った価値観（動機）（以下【価値観】と表記）と効力感（実際）（以下【効力感】と表記）はどうでしたか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

２．入学後に行った（行う）職業レディネステストや自己理解検査をする際の価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

３．コース選択や文理選択をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

４．教科・選択科目を選ぶときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

５．職業研究をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

６．インターンシップ（アカデミックインターンシップ・ジョブシャドウイング含む）等を体験するとき（したとき）の価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

７．上級学校（四年制・短期大学・専修学校等）の研究をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

８．入学試験区分（指定校・公募制・スポーツ等の推薦入試）の選択をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

９．将来、職業選択（就職先を選択）をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

10．卒業をする際、１，２年生に向け話をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

11．今後、将来のライフプランニングを考えるときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

12. 高校生活全体を考えるときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

13. 将来の夢と生き方を考えるときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

14. 自分を知るとき（自己分析をするとき）の価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

15. 職業を知るとき（職業研究をするとき）の価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

16. 職業とキャリアプランを考えるときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

17. 職業インタビューを実施するときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

18. 先輩に聞くなどの上級学校研究をするときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

19. 先生や保護者、先輩、友達に選択教科・科目を相談するときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

20. 先生や保護者、先輩、友達に進路先を相談するときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

21. 進路適性を知るときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

22. 産業・職業の変化を知るときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

23. 上級学校（学部・学科・コース等）への進学や企業などへの就職を準備するときの価値観と効力感はどうですか

【価値観】

①自分のため　：　1　全く思わない　2　あまり思わない　3　少しは思う　4　思う
②誰かのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
③みんなのため　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃
④決まりだから　：　1　〃　2　〃　3　〃　4　〃

【効力感】

自らのためだけでなく周囲や他者・社会への配慮をしたうえでの行動が出来ますか

⑤向社会的行動が：　1　全く出来ない　2　余り出来ない　3　少し出来る　4　出来る

Journal of Public and Private Management
Vol.2, No.6, March 2016, pp.1-23
ISSN 2189-2490

Exploring How Career Selection Relates to Four Human Values—Egoism, Altruism, Collectivism, and Principlism: A Study of Motivations and Perceptions When Career Selection is Made

Tatsuo Arai, Mitsuko Yamaoka, Hiroshi Ishizuka

Faculty of Business Administration, Bunkyo University
tatsuo@shonan.bunkyo.ac.jp

Recieved 1 February 2016

Abstract

The purpose of this study is to explore how career selection is processed based on four human values—egoism, altruism, collectivism, and principlism, particularly focusing on the process of the early stage of career selection and determination. Student's judgment of career selection involves thinking about himself followed by considering others and organizations as well as societal norms and rules. In this respect, research on career selection requires not only investigating the self but also examining a relationship between the self and the other, that between the self and the organization, and a consistency between the self's behaviors and societal customs and regulations. From this notion, such analyses entail importantly investigating egoism, altruism, collectivism, and principlism in relation to career selection. Thus, this study pays much attention to those four values or motivations that Charles Daniel Batson, a preeminent social psychologist, proposed in his book "Altruism in Humans". In the present study, it is assumed that students are required to restructure their cognitive schema with regard to their own career when determining a career choice at a grade early stage during school life. In this occasion, it is thought that students must judge career selection by using their values in order to resolve an indecisive and uncertain situation of their career selection in which they often face. In sum, this study will specify and discuss which four values or motivations affect the process of career determination according to the student's intention towards a career choice.

Keyword : Career selection, Egoism, Altruism, Collectivism, Principlism, Prosociality

Faculty of Business Administration, Bunkyo University
1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, JAPAN
Tel +81-467-53-2111, Fax +81-467-54-3734
http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/

経営論集　**Vol.2, No.6**

ISSN 2189-2490

2016年３月28日発行

発行者　文教大学経営学部　坪井順一

編集　　文教大学経営学部　研究推進委員会

編集長　鈴木誠

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL：0467-53-2111　FAX：0467-54-3734

http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/